

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第 60 回

「人道支援と平和構築—韓国 NGO による南北交流と協力—」

後援：同志社大学 FGSS、「女性・戦争・人権」学会

2018 年 5 月 15 日に開催されたシリーズ「グローバル・ジャスティス」第 60 回「人道支援と平和構築—韓国 NGO による南北交流と協力—」では、韓国の NGO、「民族分かち合い運動 (Korean Sharing Movement)」の政策部長であるイ・イェジョン氏をお迎えし、韓国と北朝鮮の相互理解、平和構築にむけた同団体の理念やこれまでの活動内容についてのご講演をいただいた。

Korean Sharing Movement は 1996 年、北朝鮮における深刻な食糧危機を受けて、韓国の市民団体や宗教団体によって立ち上げられ、北朝鮮への物資援助をはじめ、様々な支援、南北交流を促進してきた団体である。

同団体が初めて訪朝したのが設立翌年の 1997 年であった。それ以来 553 回、計 6,534 名（技術者、医者、公務員、研究者、事業の契約会社など多様な人）が北朝鮮での交流および活動に参加している。2000 年に初の南北の首脳会談が実現すると、緊急援助が中心であった同団体の政策は、農業支援事業、畜産支援事業、マラリア防疫事業、保健医療支援事業など、緊急援助から中長期的事業にまで拡大した。設立当初は韓国国内での南から北への援助に抵抗があり、国家情報院などによる弾圧もあったが、「北朝鮮は敵ではなく、わたしたちの姉妹・兄弟である」という信念のもと、人道支援のみならず、南北の触れ合いと相互理解を重視しているのが同団体の特徴であり、北と南の懸け橋として、20 年以上地道な活動、貢献が続けられてきた。

このような努力にもかかわらず、北朝鮮と韓国の政治的対立により、2009 年からの直接的支援が困難になった。その間の支援は他国の団体を通して行い、現金を持って北へ渡らなければならなかったという。支援額や北朝鮮への訪問者数が著しく減少したが、より深刻なのは南北の平和の問題であった。一方北朝鮮もミサイルの発射や核実験を続け、互いの敵対心は強まってしまった。

イ氏が指摘する問題点は、①人道的観点よりも、政治的問題が大きく影響してしまうこと。②国際社会による厳しい経済制裁が、一般市民の生や生活を著しく脅かすことである。

今年 4 月に行われた 3 度目の南北首脳会談を通して、南北の融和モードが高まっているが、同団体が進めてきたような相互理解のための地道な努力なしには、一足飛びに平和は実現しえないだろう。

「南北の相互理解を促進するためには、政府のみならず、草の根レベルを含めあらゆる形での交流が不可欠である。相互理解なしに、持続可能な平和はあり得ない。朝鮮半島の平和はアジアの平和、世界の平和につながるはずである。現在取り組んでいる南北朝鮮の交流は、

相互理解と和解に向けての過程であり、また共に生きるための練習である。」とイ氏は語る。

この講演を通して、平和を築くための私たちのあるべき姿勢を示していただいたと思う。「敵」というのは、自分とは相いれない別の存在、正体のわからない「他者」に対する懐疑心や恐れから作り出されるものである。イ氏が語るように、私たちは同じ人間であって、敵を作り出すことに真の安心と平和の道は見えないだろう。恐怖心や敵対心はさらなる恐怖心と敵対心を生み出すだけである。対話、触れ合いこそが相互理解、平和構築のための第一歩である。軍事力の強化を図って牽制しにらみ合うよりも、いかに対話が重要であるかを改めて実感した。

(文責：影山優華)